

せんだい

市史通信

第6号

仙台市博物館
市史編さん室



たかがり・すなどり図(部分) 伊達吉村筆 (仙台市博物館蔵)

せんだい昔
オオタカは今も

木々の葉が落ち、渡り鳥がやって来る秋から冬の時期は、昔から狩猟のシーズンでした。狩りのなかでも、鷹狩は藩主などのごく一部の階層のみに許された特別なものでした。

仙台藩歴代藩主のなかでも伊達政宗は若いころから鷹狩が大好きで、今年も例年よりも雁が多いので早く鷹を送るように、と叔父の留守政景に出した手紙も残っています。獲物を目の前にはやる気持ちを抑えきれない政宗の様子が伝わってくる手紙です。政宗は幕府から武蔵国久喜(埼玉県久喜市)に鷹狩のための広大な狩猟場を特別に与えられており、江戸に滞在している時や参勤交代の行き帰りに立ち寄ることもしばしばでした。

ところで、仙台藩に伝わった鷹狩の流派として「広田流」というものがあります。この流派の祖は、戦国時代に伊達氏の家臣であった広田伊賀守宗綱という人物です。実は、広田

宗綱の娘は伊達氏の重臣である増田氏に嫁ぎ、のちに政宗の乳母となっているのです。政宗が鷹狩を好んだのも、あるいはこのような関係とかかわりがあるのかもしれません。

近年、青葉山の公園整備や若林区荒浜におけるヘリポート建設に際して、その付近にオオタカの生息地が見つかり、計画と自然保護をどうするか問題になったことがありました。鷹狩に用いられる鷹には幾つかの種類がありますが、オオタカはその代表的な種類なのです。

あまり知られていませんが、かつて仙台市付近は鷹狩に用いられる鷹の産地として知られていた所でした。戦国時代の記録や伊達政宗の手紙を調べると、留守氏や国分氏の領地や名取郡から、鷹が米沢(山形県)の伊達家の許に届けられた事例を幾つもみることができます。荒浜や青葉山でのオオタカ発見は、鷹狩がすたれ、自然環境が大きく変わってしまった今でも、かつての鷹の産地としてのなごりを思い起こさせる出来事でした。



『仙台市史』 新刊登場!

「仙台市史」の新刊『通史編3 近世1』と『資料編6 近代現代2 産業経済』が刊行されました。
『近世1』ではいよいよ仙台開府を迎え、江戸時代に入っていきます。一方『近代現代2』は、明治以降の仙台の産業と経済に関する資料を多数収録しています。
今回はこの2冊をご紹介します。

通史編3 近世1

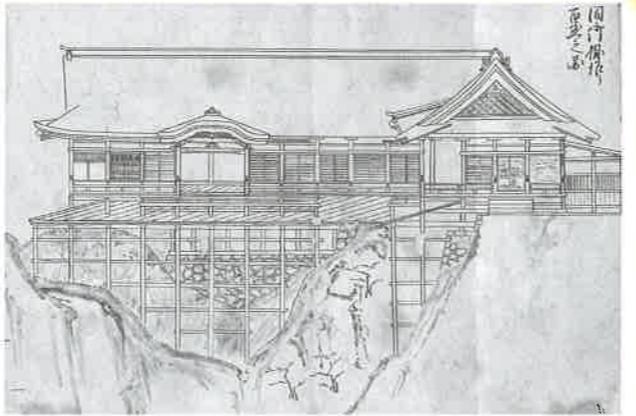
『通史編3 近世1』は、全3冊の刊行を予定している『通史編 近世』の1冊目です。7つの章と3つの特論からなる本書では、伊達政宗とその子忠宗の治世(16世紀末～17世紀半ば)を中心に取り上げています。

第一章「伊達氏の入部」は天正18年(1590)、伊達政宗が豊臣秀吉に従うため、小田原に参陣するところから始まります。その後、政宗は米沢から岩出山へ移りますが、このとき決められた領地がのちの仙台藩領の原型となります。

第二章「仙台開府」では、関ヶ原の戦いが行われた慶長5年(1600)に、政宗が築城を開始した仙台城と、都市計画によって造られた城下町を扱っています。

政宗の政治手腕について触れているのが第三章「政宗の政治」です。ここでは慶長遣欧使節、幕府との関係、家臣への対応と領内の整備が取り上げられています。

仙台藩の藩政の基礎を築いたのが政宗とすれば、2代藩主の伊達忠宗はそれを引き継ぎ、確立した人物といえます。第四章「藩支配の成立」では忠宗が実施した政策として、藩を支えた支配組織の整備と身分制の確立を紹介し、第五章「村落の成立」では、藩の経済を支える基盤といえる村落の制度と新田開発を取り上げています。



「仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図」より本丸懸造(仙台市博物館蔵)

藩政を領内に浸透させ、産業を育成するのに不可欠なのが交通網の整備です。第六章「交通体系の成立」では、仙台藩の陸上・海上における交通網の整備について述べています。

第七章「伊達文化の開花」では、奥羽固有の地域文化に、政宗がもたらした桃山文化を融合して生まれた伊達文化について、仙台城や大崎八幡宮、瑞巖寺などの建築物と、代表的な美術工芸品を題材に論じていきます。

また、すぐれた文化人としての政宗を紹介する「伊達政宗の教養」、建築史という立場から仙台城を見直す「仙台城の建築」、そして仙台藩の参勤交代の実態を説く「仙台藩の参勤交代」を特論として収録しています。

施設探訪

宮城県公文書館

仙台市史で使いたい写真や資料が博物館にないとき、必要なものはそこからお借りします。また、資料が見つければ調査にでかけたりもします。このコーナーでは、市史編さん事業の過程で訪れた施設をご紹介します。

宮城県公文書館は、宮城野区榴ヶ岡の旧宮城県図書館の建物を改修し、平成13年4月に開館しました。県が作成した文書(公文書)の収集・保管と利用者への提供が、公文書館の主な仕事です。

ここでは、明治以降の公文書のうち、歴史的価値のある県庁文書約4万冊や絵図面約1500枚が収蔵されています。それらは整理が終わったものから順次利用できるようになっています。調査や研究のための閲覧はもちろん、館内には展示室もあるので、気軽に公文書を見ることが出来ます。

また、資料を探しているという方のために、「メール検索サービス」が行われています。これは探している資料の内容を電子メールで送ると、公文書館が所蔵している文書から関連資料を探してくれる、というものです。出かけてすぐに資料が見たいという方には便利でしょう。

宮城県公文書館
仙台市宮城野区榴ヶ岡5
TEL/022-791-9333
開館時間/9:00~17:00
休館日/●月曜日 ●国民の祝日・休日(土曜日・日曜日にあたる日を除く) ●年末年始 ●臨時休館(特別整理期間等)

資料編6 近代現代2 産業経済

右は『資料編6 近代現代2 産業経済』の口絵に掲載されている番付表です。産業経済がテーマの本になぜ相撲の番付表があるのでしょうか。

大関が「米営業」と「味噌商」。前頭には「八百屋」や「酒類営業」もいます。しこ名にしては変な名前ばかりです。

実は、これは明治15年(1882)に作られた、『仙台区内営業一覧表』という、相撲ではなく商工業の番付表です。富豪や名物などを、相撲の番付表という形でランク付けをして出版する手法は、当時流行したものです。

この表には、仙台の旧城下町区域にあった商店やサービス業、家内手工業、行商などの軒数や人数が収められています。業種名の下に数字がそれぞれです。件数の多いものが必ずしも上位に来ていないのは、単純に数だけではなく、営業状態や繁昌の程度も考慮されているためと考えられます。

今となっては内容が分からない職業もありますが、これだけ多くの業種が並んだ番付表からは、庶民の生活の多様さが伝わってきます。前頭の「時計商」や「写真屋」などは、文明開化の雰囲気を感じられます。

昔の産業や経済の動きを知るうえで、計画書や規則などの

書類が資料として重要なのはもちろんです。しかし、番付表というちょっと変わった形でも、当時の商工業や人々の生活の姿を垣間見ることが出来ます。

『資料編6 近代現代2 産業経済』では、明治期から現在にかけて発展してきた仙台の産業経済の足跡を、354点の資料と年表・解説によって明らかにしていきます。



「仙台区内営業一覧表」明治15年作成(仙台市博物館蔵)

『市史せんだい』 のお知らせ

『仙台市史』の機関誌『市史せんだい』は年1冊刊行で、現在Vol.11まで発行されています。

Vol.11の特集は、今年行われたみやぎ国体にちなみ、昭和27年に東北3県で開催された国体についてまとめた「仙台と国民体育大会」と、今年で没後250年を迎えた5代藩主伊達吉村を論じた「伊達吉村の時代」の二本立てとなっています。

『市史せんだい』のお求めは、仙台市博物館2階売店でどうぞ。

価格は1冊900円(税込み)です。

Vol.1とVol.2、Vol.4は品切れとなっております。



既刊紹介 特別編4 市民生活

明治のはじめから現代に至る130年以上という長い年月は、仙台の街の姿と人々の暮らしを大きく変えていきました。かつての城下町は、今や100万の人口を抱える都市へと発展し、私たちは常に多くの情報に取り巻かれて生活しています。

『特別編4 市民生活』では、明治時代から現在にかけての仙台市民が営んだ生活を、衣食住をはじめ、教育や福祉、交通などに分けて紹介しています。100以上のテーマをコラムとグラビアをまじえて構成し、4~8ページにまとめられたテーマは、どこから読んでも楽しめる内容です。写真や図表などが600点以上掲載され、街並みや市民の様子をとらえた写真、あるいは当時の広告やポスターなどを通じて、人々が生きた時代そのものをうかがい知ることが出来ます。

巻頭には「仙台の風景 今・昔」と題して、市内各所の現在と昔の写真が並んでいます。昔の仙台を知る人にとっては懐かしく、知らない人には新しい発見となるでしょう。



「仙台名所」より仙台停車場の図(仙台市博物館蔵)

モノがたり仙台

まつかわだるま

松川達磨

仙台の伝統工芸品である松川達磨は、胴に宝船などを飾った豪華な張子の達磨です。12月25日から1月5日の初売りまで開かれる歳の市（仲見世）で売られる縁起物で、各家では毎年少しずつ大きい達磨を買い求めて神棚に飾る風習がありました。

松川達磨は、藩政時代に松川豊之進が創案したと伝えられることからこの名があるといわれています。しかし、松川達磨と呼ばれるようになるのは昭和に入ってかららしく、河

北新報では明治41年（1908）に「達磨」、大正14年に「仙台達磨」とあり、昭和3年発行の仙台鉄道局編集『東北土俗玩具案内』に初めて「松川達磨」、昭和6年に仙台で開催された全国郷土達磨展覧会の目録に「陸前仙台松川達磨（張）」とあります。松川達磨の原型は明治になって面徳（高橋徳太郎）によって創り出され、面徳達磨や仙台達磨と呼ばれていたようですが、どのようにして松川達磨と呼ばれるようになったかわかっていません。

面徳父子（徳太郎、利三郎）は大正8年の南町大火の頃まで達磨を作っていました。仙台の達磨屋は、河北新報によると明治41年に4軒、大正14年には「市内木町末無の佐々木屋を始め堤町に一軒、北七番丁に兄弟の達磨屋が二軒、都合四軒」があったようです。昭和5年に仙台市が実施した家内工業調査によれば、達磨製造業者は通町・本郷徳治（本業）、北鍛冶町・本郷軍也（副業、本業は瓦葺き、徳治の弟）、堤町・佐藤銚吉（副業、本業は商業・農業、ほかに飾製造の副業）、同・佐藤大吉（副業、本業は堤焼土管製造）の4軒ですが、本郷徳治の調査記録に同業者

として「木町末無・佐々木勇吉」の名があり、河北新報などで確認できます。佐々木勇吉は面徳が廃業したとき、その達磨型を譲り受けて達磨屋になりました。なお、現在も松川達磨を作っている通町の本郷家は藩政時代から、堤町の佐藤家は明治時代からの達磨屋です。



松川達磨（写真提供 仙台観光コンベンション協会）

市史セミナーが 開催されました

「仙台市史セミナー」は、仙台市史の執筆者が市史の内容について講演を行うイベントで、年に1回行われています。

今年で11回目となるセミナーは9月22日（土）に開催され、約250名の方にご参加いただきました。題して「藩政のはじまり—政宗・忠宗の時代—」。「通史編3 近世1」の執筆者である齋藤鋭雄（宮城県農業短期大学名誉教授）、渡邊洋一（仙台都市総合研究機構主任研究員）、阿部和彦（秋田工業高等専門学校教授）の三氏が、それぞれ政宗と忠宗、参勤交代、仙台城をテーマに、仙台の近世初期について講演しました。



市史編さんでの研究の成果が発表されました

おねがい

市史編さん室では、資料を探しています。古い文書や写真などございましたら、ぜひ編さん室までお知らせください。

既刊
好評発売中

仙台の歴史を完全収録 各分野ごと続々登場

- 【通史編3】近世1（新刊）
- 【資料編6】近代現代2 産業経済（新刊）



●発売元／宮城県教科書供給所
〒980-0021 仙台市青葉区中央二丁目9-22
TEL/022-222-5052 FAX/022-222-5056
県内主要書店で発売します。本の発送をご希望の方は、上記あてにお申し込みください。
●詳しくは、仙台市博物館市史編さん室までお問い合わせください。
仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862 仙台市青葉区川内三の丸跡
TEL/022-225-3074 FAX/022-216-1830

- 【通史編1】原始
- 【通史編2】古代中世
- 【資料編1】古代中世
- 【資料編2】近世1 藩政
- 【資料編3】近世2 城下町
- 【資料編4】近世3 村落
- 【資料編5】近代現代1 交通建設
- 【資料編10】伊達政宗文書1

- 【特別編1】自然
- 【特別編2】考古資料
- 【特別編3】美術工芸
- 【特別編4】市民生活
- 【特別編5】板碑
- 【特別編6】民俗

- 【通史編】 3,000円（税込み価格）
- 【資料編】 4,000円（税込み価格）
- 【特別編】 6,000円（税込み価格）
- 板碑のみ 5,000円（税込み価格）

1冊ずつお求めできます

続刊予定

- ◆通史編 / 近世2～3・近代1～2・現代1～2
- ◆資料編 / 近代現代3～4・伊達政宗文書2～4・文化芸能
- ◆特別編 / 城館・慶長通欧使節・地域史

あとがき

編さん室より

今回の「市史通信」第6号は新刊紹介を中心にお届けしました。仙台市史編さん事業も今回の新刊2冊で計画の半分を超えました。今後も皆様により親んでいただける仙台市史づくりを室員一同心がけていきたいと思っております。

せんだい 第6号

市史通信

発行年月日／平成13年11月30日
編集・発行／仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862 仙台市青葉区川内三の丸跡
TEL/022-225-3074 FAX/022-216-1830
URL <http://www.city.sendai.jp/kyouiku/museum/>